

しよくべい 食紅

作・^{ひらの}平野 ^{まさき}正喜

あらすじ

終戦から数年後、占領下の某国政府食料省食品課は廃れ、課長と部下の松下の二人になっていた。そこに、占領軍に通訳として出向していた雛子が帰ってくる。雛子は愛人である占領軍の少佐から、課長が研究していた食用色素＝食紅に予算をつけるので産業化せよとの伝言を伝える。カラフルな食品文化の復活を目指し躍動する課長。しかし、これは少佐が本国で展開している食品会社が某国に極彩色のジェリービーンズを売りつけるための策略だったことがわかる。さらに、食紅に発がん性があることが報じられ、食品会社の支社長となった雛子は手のひらを返して撤退する。食紅は人工物だからダメだなんだと責める松下に課長は人間も天然の一部だと反論しつつ、天然色素での反攻を企てるが…。